パンデミック発生時に国際支援を担う看護職の準備教育プログラムの開発

Development of a Pre-Education Program for International Support Nurses During a Pandemic

○松永早苗[1]，塩野悦子[2]
Sanae Matsunaga, Etsuko Shiono
1　神奈川県立保健福祉大学実践教育センター，2　東北福祉大学健康科学部
Kanagawa University of Human Services, Tohoku Fukushi University

【背景と目的】

歴史上、感染症が国を超えて大流行する（以下、パンデミックと略す）ことが繰り返されている。国際支援を担う看護職にとりパンデミックへの支援は、他の国際支援と異なり困難を生じることが予測される。

そこで本研究の目的は、パンデミック発生時に国際支援を担った看護職の困難と対処を明らかにし、その結果を基にパンデミック発生時に国際支援を担う看護職の準備教育プログラム（以下、準備教育プログラムと略す）を開発することである。

【方法】

研究の第 1 段階では、エボラ出血熱パンデミック発生時に国際支援を担った看護職と看護職以外の医療職を対象に、看護職の困難と対処について半構造化面接を行った。看護職の逐語から、困難と対処の記述に焦点をあてコード化し、コードの類似性や差異性に着目してサブカテゴリー、カテゴリーを抽出し、比較継続にて分析を行った。看護職以外の医療職の逐語は、看護職の状況を客観的に捉えた内容においてデータに追加し分析した。

研究の第 2 段階では、研究第 1 段階で明らかになった困難と対処を基に準備教育プログラム試案を作成し、さらにフォーカスグループ・インタビューと評価表を用いて、その準備教育プログラム試案について専門家から評価を得ることとした。

本研究は、宮城大学研究倫理専門委員会の承認を得た。

【結果】

研究第 1 段階では、看護職 3 名、看護職以外の医療職 6 名を対象とし、パンデミック発生時に国際支援を担った看護職の困難として、【支援に行く前からの恐怖】、【根強い周囲の反対】、【現実化する恐怖】、【業務の過酷さ】、【感染を食い止められない無力感】、【支援後の心のアンバランス】、【活かされない教訓】の 7 つのカテゴリーが抽出された。またこれらの困難への対処として、【経験知を駆使して精神状態を保つ】、【周囲との折り合い】、【自分の身を守るための工夫】、【現地に即した柔軟な姿勢】【心のアンバランスを調整】、【経験者として社会に発信】の 6 つカテゴリーが抽出された。

研究第 2 段階では、パンデミック発生時に国際支援を担う看護職が、研究第 1 段階で明らかになった困難を事前に学び、困難への対処を準備することができる準備教育プログラムの試案を作成した。準備教育プログラムは、困難を視覚的に理解できるように困難を支援前、支援中、支援後に分けて動画教材を作成した（動画資料 1）。【業務の過酷さ】は、実技やゲームを通して困難を理解する構成とした。看護職は、これらの教材を使用して困難を理解したのちに、グループワークにて対処を討議し、共有する内容とした。最後には、研究第 1 段階の結果である困難と対処を解説することとした。

さらに、6 名の専門家のフォーカスグループ・インタビューより、作成した準備教育プログラム試案について多くの点で賛同され、実用性があることが分かった。また、準備プログラム試案の改善点であるファシリテーターの配置や時間配分を加筆修正し、準備教育プログラムの開発に活かした。

動画資料 1

【考察】

本研究では、パンデミック発生時に国際支援を担う看護職のための準備教育プログラムが開発された。エボラ出血熱パンデミック発生時に国際支援を担った看護職の困難と対処の経験を基に準備教育プログラム試案を作成し、さらに専門家からの評価を得たことで、より準備教育プログラムの信頼性が高まった。今後のパンデミック発生時の看護職の活動や教育に活かされると考えられる。

【研究の限界】

本研究では、看護職が 3 名と少なかった。今後は、看護職に焦点をあて継続した研究を続ける。また、エボラ出血熱以外のパンデミックにおいて支援を担う看護職に焦点をあてた研究を継続する。

【結論】

パンデミック発生時に国際支援を担った看護職の困難やその対処を基に、看護職の準備教育プログラムを開発した。

本研究は、平成 30 年～平成 32 年度 JSPS 科学研究費補助金基盤研究 C による研究助成を受けて実施したものである。本論文に関して、開示すべき利益相反関連事項はない。